# 昇天と復活への思い
## ――ヘンリー・ヴォーン小考（十）――

森田　孟

人は、実存の根底を揺さぶられる事態に見舞われた時、例えば最愛の人に突然死なれたり、自らの信念や信条の変更を迫られるような政情・社会の急変に直面したりした時など、どのように振る舞い、如何なる生き方をすべきであるか、その答への模索をも、これまで概観してきたように、十七世紀英国の激動期を生き凌いだヘンリー・ヴォーン（Henry Vaughan, 1621-95）の『火花散る燧石』*Silex Scintillans*（1650, 1655）は、現代の我々に垣間みせているのではなかろうか。

今回はまず、次の作品をみてみよう。

**申し出　The Proffer**[1]

やはり黒い〈居候〉のままでいよう
　もうこれ以上ばたばたしないでいよう、
以前同様　今尚冬なら
　君は飛んだりしないだろう、
しかし今は露と〈太陽〉が私の四阿を暖めてくれたので[2]
君は飛び立って集まってゆく　花々を吸い込もうと。
　しかし君なら蜂蜜を作るだろう[3]
この花々の芽は萎れるだろう

だから君が今引き出すものは　もっと厳しい天候になると
　食用に役立つことだろう
賢い農夫は（と君は言う）そこで諸々の欠乏に予め備える
　だろう
　そうしないと後悔先に立たずになる。

　おお　有害で狡猾な羽根持つ生物よ(4)
　　地獄の蠅どもは
耳という耳でぶんぶん唸り、魂に蛆を湧かせて(5)
　遂には悪臭を放ち
腐って、ここには降りないし留まろうとも思わない、
　私は読んだ、それが誰にしろ君を追い払ったのだと。(6)

　君よ考えたまえ、これら憧れやまぬ眼を
　　病んで疲れ切って
殆ど餓死せんばかりながらとにかく去ることに同意
　するだろう　あの空を
あの魂と聖霊のガラスを、そこでは着飾って(7)
　彼らは白衣に（星々のように）輝いて憩っている。(8)

　私の短い時間、私の一インチ、(9)
　　私の哀れな砂粒、
そして生命のかけらは、今や反発と
　　後込みを取り消そうと
日がな一日その重荷を担いながら
　夜になると私の〈王冠〉(10)を放り棄てるのだろうか？

　いや、いや、私は彼ではない、
　　どこか他の所へ探しに行きたまえ。
私は気にしない、君の立派な金ぴかものを、付け毛を
　　君の〈魔術〉と
滑らかな誘　惑を、私は私の経歴に詰めこむつもりはない
　君の〈共和国〉と栄光を。

　そこには生きている者の間に(11)
　　毒麦を播き
死を撒き散らして自らの魂と呼吸を売って
　　商品を得る輩がいる、
だが汝の〈主人〉がやって来ると(12)彼らは気付いて分るのだ
　自分たちと汝への報酬があることに。

だから昔からの道を守ろう！[13]
　彼らの痰を吐き出して[14]
汝の胸を家庭（ホーム）で充たせ、汝の夢を熟考せよだ[15]
　穏やかな明るい日よ！
花々と香料の〈土地〉よ！　さあ　言葉だ、
**もしこれらが正当なら、おお何たるものか〈天国〉とは！**

［M・四八六―八八］

**訳注**

（1）　ヴォーンは共和国［一六四九年の君主制廃止から一六五三年の護国官制確立までの英国政体］下での或る地位（おそらく地方行政機関の官吏）の申し出をされてそれを断ったことにこの詩は言及しているとハッチンソンはみている［H・一二四―一二五］［M・七四六］。／その解釈は正しいことを三五―三六行「私の経歴に君の〈共和国〉と栄光［Commonwealth and glory = glorious Commonwealth. 二詞一意（hendiadys）、ヴォーンも愛用する語法］を詰めるつもりはない」が強力に示唆している［RA・五九五］。

（2）　ここはヴォーンが病気から回復したことか、あるいはもっと当っていそうだが最初の妻の死による遺産で彼の経済状態がよくなったことを指しているか、と前掲ハッチンソンは示唆する［M・七四六］。
　ダールはこの行を、詩人の精神状態を自己満悦の気持で言及していると解釈する［D・一〇一］。

（3）　この第二連の最初の行は詩人による皮肉であり、残りの部分は「君は言う」によって支配されていると読むべきもの。つまりこの連の後の部分は「申し出」を支持しようという居候の主張を表している［RA・五九五］。

（4）　fowls. 現在は廃れた「羽根持つ生物」の意（*OED* fowl sb 2）。ヴォーンは「鳥」の意味では使っていそうにない［RA・同］。
　次行の‘flyes’も「羽根のある昆虫」なら何でも指す今は廃れた意味。諺の「蝿は花蜜に従う」“A fly followeth the honey”や魔王のベルゼブブ（Beelzebub）は「蝿の王様」‘lord of the flies’だったことも想起される［同］。

（5）　blow on souls. 「蝿」にある「居候」「阿り屋」の意味（*OED* fly 5c）に鑑みてここでは廃れた意味の「誇りや虚栄で得意になる」が適切だろう［RA・五九五］。
　シェイクスピアはこの観念を見事に融合している、「この夏の青蝿共は気障な己惚れの蛆虫をたっぷり俺の体の中に生んで膨らしてくれた」（『恋の骨折り損』v・ii・四〇九）［同］。

（6） I've read , who 'twas, drove you away.「出エジプト記」8・31「主はモーセの言葉に従って蝿の大群をファラオと家臣と民から飛び去らせた。それで一匹も残らなかった」［M・七四六］。

（7） That glass of souls and spirits.「ヨハネの黙示録」21・21「都の通りは透き通ったガラスのような純金であった」［RA・五九六］。

（8） They shine in white.「ヨハネの黙示録」7・9「見よ、数え切れないほどの大群衆が白衣を身にまとって…」［同］。

（9） my short hour, my inch. G・ハーバート「不平を言い続けて」"Complaining"［五行詩四連二〇行の詩、WiL・五〇〇―二］の一六―一八行目「御身の怒り溢るる力に／私の時間を／私の生命の一インチを苦しませないようにしよう」を参照［M・七四六］。

（10） my Crown. = of eternal life. 永遠の生命を有する。「コリント人への手紙」一、9・25「私たちは朽ちない冠を得るために節制する」［RA・五九六］。

（11） この連の譬喩の背後には、毒麦と麦の譬え話がある。「マタイによる福音書」13・24―30、37―40。

（12） when thy Master comes. = at the Last Judgement. 最後の審判の時に［RA・同］。

（13） the antient way. ヴォーンの詩「**決意**」二二行目に同句がある［**小考**（八）51］。

（14） Spit out their phlegm / And fill thy brest with home. G・ハーバート「教会の玄関」"The Church-Porch"［六行詩七七連計四六二行の詩、WiL・四七―八三］の九二行目「御身の痰を吐き出して御身の胸を栄光で充たせ」Spit out thy flegme, and fill thy brest with glorie.と比較せよ［M・七四六］。／胸を家庭で充たせ、とは天国のことを考えよ、ということ。天国はヴォーンにとっては「家庭」なのだ［RA・五九六］。

（15） think on thy dream. G・ハーバート「定量」"The Size"［六行詩八連計四八行の詩、WiL・四七九―八三］の四四―四七行目「思い起こせ　汝の夢を／地球を／その子午線上には彫りつけられていた／これらの海は涙であり、天国は安息所だと」を参照［M・七四六］。

音節数は行頭の出入りが示すように一行目から順に6 4 10 4 10 8で、ABBACCの型（第三連のみABABCC）で押韻する六行詩八連から成る。

この作品も、作者のいつもの流儀でバイブルの章句やハーバートの詩句をごく自然に想起し、言及・挿入しながら、頭韻を多用し、軽快にしかしくねくねと含蓄に富む表

現を重ねて、時の勢力に阿ることなく自己の信念を貫く凜たる一つの生き方を静かに形象化したものである。

前号掉尾には「**種子密かに成長して**」を挙げたが、ここで、その作品の背景にある譬え話の語り手イエス・キリストの昇天と復活が話柄の作品を取り上げよう。

## 復活祭の日[1]　Easter-day

汝、悲しみに心も沈み　泣き濡れながら項垂れ
〈曇った〉胸[2]を冷たい湿りに侵され
およそ〈太陽〉を感じることも眉の皺を伸ばすこともなく
　陰に打ち拉がれて蹲っている汝よ、
　　目覚めよ、目覚めよ、
そして彼の方（かた）の〈復活〉に加わるのだ、
　彼はこの日に（なら汝も同じく起き上がれそうだ）
　起き上がって汝に当然の二つの死[3]を償って下さった。
目覚めよ目覚めよ、そして〈太陽〉のように追い払うのだ
　この日を強奪しそうな靄を悉く、
どこにあるのか汝の〈棕櫚〉は、汝の枝々は、汝の詩は？
　**ホサナ！**[4]　聴きたまえ、何故汝は留まっているのか？
　　起き上がれ、起き上がれ、
そして彼の治癒力に富む血を塗るのだ　汝の〈両眼〉に
　汝の裡（うち）なる〈両眼〉に、彼の血が汝の心を癒されよう
　彼の唾液しか盲（めし）いの人[5]を治せないのだから。

［**M**・四五六］

**訳注**

（1）春分後の最初の満月の次の日曜日で、キリストの復活を祝う祭りである復活祭［クリスマスと共にキリスト教の大祭日］が行われる。

（2）Cloudy brest. ヴォーンの詩［**記七**］［**小考**〈九〉15］の五行目「私の曇った胸の中で」とG・ハーバート「告白」“Confession”［六行詩五連計三〇行の詩、**WiL**・四四二―四五］の最終行「それら［私の欠陥と罪］は濃くなって私の胸に曇りとなる筈」と比較せよ［**RA**・五七三］。

（3）two deaths. G・ハーバート「多忙」“Business”［二行詩四連、三行詩一〇連の組合せで計三八行の詩、**WiL**・四〇三―六］の二二行目「そして二つの死は、御身の報酬（fee）だった」、及び、ヴォーンの詩「**樹液**」“The Sap”の二二行目「二つの死は御身の当然受けるもの（due）だった」と比較せよ。二度目の死とは、最後の審判の際の、迷

える魂への糾弾で、永遠の死のこと。次を参照、「ヨハネの黙示録」20・6「第一の復活に与るものは幸いなる者、聖なる者、この者には第二の死は何の力もない」、「同」20・14「死も地獄も火の湖に投げ込まれた、これが第二の死だ」、及び、「同」21・8「しかし臆病な者、不信仰者、忌まわしい者、人を殺す者、淫らな行いをする者、魔術を使う者、偶像崇拝者、悉く嘘をつく者、彼らは火と硫黄で燃える湖に浸り込む、それが第二の死だ」［**M**・七四〇］。

（4）*Hosanna!* 神またはキリストを讃美する言葉。

（5）Whose spittle… the blind. イエスが自らの唾で土を捏ねてそれを盲人の眼に塗ってその眼を開いてやった話に言及。「ヨハネによる福音書」9・6―7［**F**・二一七］。「マルコによる福音書」8・22―26［**RA**・五七三］。

韻律と形状は、G・ハーバートの「**夜明け**」"The Dawning"［**WiL**・三九八―四〇〇］と全く同じで、二連共ABABCCDDの型で押韻し、各行の音節数は順に、10 8 10 8 4 10 10 10であるが、ヴォーンの作品は第一連の六行目が九音節で変化をつけてある。

落ち込んでいる自分（とその同類の人々に）「汝」と呼びかけながら、復活祭を祝うことで「彼＝イエス」にあやかって、目覚めて起き上がって「復活」しようと自他を鼓舞する作品である。

ここで、比較のために、今触れたばかりのG・ハーバートの「**夜明け**」を一瞥しておこう（ヴォーンにも全く同じ標題の作品――「**夜明け時**」と拙訳した［**小考**〈八〉41―43］――があるが、それはおよそ異なる詩であった）。

**夜明け　The Dawning**（ハーバート作）

目覚めよ悲しむ心よ、悲しみがいつも水浸しにしている心
　眼を上げよ　地上で糧を得る眼を、
しかめ面になった額を広げよ
〈救世主〉がやってくる、浮き立つ気分を伴って、
　　目覚めよ、目覚めよ、
そして感謝の心で彼の慰めを受けよ。
　それでも汝はやはり嘆き、切望し、泣き叫び、
　そして感じ取るのは彼の死で、彼の勝利ではない。
起き上がれ悲しむ心よ、もし汝が逆らわなければ
　キリストの復活が汝のものになるかも知れない。

ぶらさがることで手から離れ落ちるな、
　それは起き上がる時　汝を起こすのだ、
　　起き上がれ、起き上がれ、
そして彼の埋葬用亜麻布で汝の眼を乾かそう、
　キリストは自らの墓用衣装を置き去ったので　私たちは　悲嘆が
　涙か血を引き出す時も　よもやハンカチを欲しがったりはしまい。

要するに、悲しんでいる人を鼓舞激励する詩だが、標題の「夜明け」には少なくとも三種類の意味があると、ウィルコックスは言う。（一）太陽であるキリストが死の状態から起き上がる復活際の日の日の出、（二）「悲しむ心」が「目覚め」て「起き上がる」新しい日の始まり、そして、（三）起き上がったキリストは悲しむキリスト教徒に慰めを与えないで立ち去ったりはしないという認識、である［WiL・三九九］。

その他、「勝利」とは「復活」「蘇生」のことであり、「ハンカチ」は涙を乾かし傷の出血を止める布であると共に、奇蹟的な治癒をもたらす手段でもある、などの注釈、及び、多くのバイブルへの言及や典拠についての詳細は、ウィルコックス［WiL・三九九―四〇〇］に譲っておく。

ヴォーンに戻るが、直ぐ続いて次の作品が現れる。

## 復活祭讃歌　Easter Hymn

死と闇が君を包み込む、
何も今や人間に欠けているものはなくなる、
君の勝ち誇りは悉く　今や終った、
そしてアダムの損なったものが修復される、
墓は今や疲れ切った者への寝台で
死は仮眠、もっと陽気に目覚めんがための、
若者は今や敬虔な義務に満ち
御身の中に完璧な美を捜し求め
弱くて日々の長さに倦んだ
年老いた者は　御身から新たな力を求め
〈幼い者たち〉は御身の激痛を〈目指(コンテスト)して競い〉[1]合う
愉しげに　まるで乳房を求めるみたいに、
　だから彼の方(かた)に讃歌を、こうして〈蔑む〉までに
御身の王国を投げ棄ててしまったのだから

そして自らの血で私たちを押し進めて
己れ自身を〈受け継〉がせたのだから、
彼の方に栄光を、力を、賞讃を、
この日から　日々の最後に到るまで。［M・四五七］

**訳注**

（1）　ペテットは、ヴォーンが「時々乳飲み子に関わる暗喩」を使う［P・一七七］ことに注目している［RA・五七三］。

ベセルが最初の六行を引用して、「キリスト教の尊厳を示す畏怖からの自由を、的確に表現する、陽気で殆どずうずうしいまでの馴れ馴れしさで始められる」（BS・一三七）と述べるこの詩で、'you' 'thou' 'he' と書き分けられている代名詞を、拙訳ではそれぞれ「君」（人間［一般］）、「御身」（イエス・キリスト）、「彼の方」（神）と訳し分けた。イエスの血は、神自らの血ということになるのだろう。イエスを復活させたのは神だから、復活祭讃歌とは神への讃歌である。

「この日」（復活祭の日）から世の終りまで讃歌を捧げられるような神（であって欲しく）そのような神を賞讃できる我々でありたい、という願望が読み取れまいか。二行ずつ対で押韻してゆく（一三行目と一四行目が視覚韻）全て八音節の一八行詩。

以上の「復活」関係の二作品は第一部に収録されているが、次の「昇天」関係の二篇は、ベセルが神秘的な書き方の最上の例とするもの［BS・一四一］で、この二篇から第二部は始まっている。

## 昇天日[1]　Ascension-day

〈主〉イエス様！　何と素敵な楽しみで　紛れもなく
神聖な希望で、胸の高鳴る喜びと生き生きした躍動で
御身は御身のものを力づけることか！おお御身！あの方[かた]へ
と上ってゆく手[2]、悉く良質の完全な贈物[3]をする方[かた]。
御身の栄光に充ちた輝かしい〈昇天〉は（私から
何〈世代〉も隔っているが）それと証明され、御身の
〈霊〉によって私には確かなものと証印されているので[4]
私には御身の勝利[5]に与[あずか]っているものと感じ取れるのです。
　　私は舞い上がり昇ってゆく

空へ空へと、
この世にその最盛期を残しながら
そして飛翔しながら
真実の光を求めて
ずっとはるばる探し続ける、
私は御身の〈墓(セパルカー)〉に挨拶し、御身の〈埋葬場(ゲレイヴ)〉に敬礼する
あの祝福された囲い地に、そこで〈御使い方〉がもたらし
たのだ[6]
最初の喜ばしい消息を、御身の早朝の光について
大地と夜からの蘇りについて。
私にはあの朝が見える　御身の〈改宗者[7]〉の涙の中に
露のように瑞々しく、それをこの夜明けだけが身に纏うの
か？
私には嗅ぎ取れる、彼女の芳香[8]が、すると彼女の軟膏が放
つのだ
今の〈サクラソウの花園[9]〉のように馥郁とした香りを、
〈真昼の星(デイ・スター)[10]〉は微笑み、亡くなった御身に伴う光は[11]、
今　〈東方〉の〈部屋部屋[12]〉で光輝く。
どのような騒動が、どのように足早の浮き浮きした[13]
〈聖人方(がた)〉と〈御使い方〉との交わりが大地を讃美するの
か？
どのような溜息が、囁きが、忙(せわ)しない停止が抑制が
内輪の神聖な語らいをずっとどこまでも満たすのか？
それらは最後の大いなる日の時のように走り過ぎてゆく
各々白い長衣を纏って、昇った〈太陽〉を求めて、
私にはそれらが見え、聞こえ、急ぎ去るのに気付き、動き
回るのだ　それらの間を、一緒になって、信仰と愛の翼を
つけて。
御身の四十日に及ぶもっと密かな交渉は[14]、ここで
御身の死と〈葬儀〉の後に、甚だはっきり
議論の余地なく[15]　私の目には〈太陽〉同様に
みえるが、それがあの日々に光を与えたのだ。
私はベタニア[16]の野を歩く、そこは〈エデンの園〉と同じく
今　みるからに瑞々しく見事に輝いている。
そういうのが明るい世界で、最初の七日目[17]のことだった、
人間がまだ罪を、罪が腐敗を、持ち込まないうちだった、
〈**花々**〉と**緑**を纏った〈処女(おとめ)〉のように
清らかな大地は座っていて　美しい森は些かも[18]
霜を見たことがなく、あの若々しい衣服を着て繁っていた
彼らの大いなる〈造物主〉に纏わせてもらったのだった、

その時上では〈天国〉が溶融(とけ)たガラスのように輝いていた[19]
〈惑星〉が悉く雲に覆われもせず通行している間、
そして〈泉〉は各々〈流れ〉を溶けた〈真珠[20]〉のように注
いでいた
洪水に損なわれることなど決してなく、驟雨にも怒らず。
こういう晴やかな(フェアー)思いを抱きながらこの晴やかな(フェアー)所を私は
動き回り
私の穏和な〈主人〉の最後の足取りを辿ってゆく、
私には見える　彼が自ら選んだ〈お伴〉を導いてゆくのが
皆悲しんで涙を流しているが、暖かな〈夏の雨〉のように
静かな滴となって彼らの神聖な眼から忍び出て
つい最近まで〈十字架〉に注いでいたのに今は空に向かっ
ている。
それで今や（永遠のイエス様！）御身は尊い
諸手を持ち上げて祝福し[21]、それらを置き去りにする、
雲が今や御身を受け入れるので　彼らの視野に[22]
御身は入らなくなり、白衣の二人が見えてくる！
二人であってそれ以上ではない、**二人が確証することは真**
**実である**[23]、
とは、頑固なユダヤ人への御身自らの答だった、
だから来て下さい、御身忠実な目撃者よ！　来て下さい[24]
尊い〈主〉よ〈雲〉の上に再び　この世を裁くために！
［**M**・四八一―八二］

**訳注**

（1）キリストの昇天した日のことで、復活祭(イースター)から四〇日後の木曜日。
（2）the hand that lifts/To him.「ヨハネによる福音書」12・32「私は、もし地上から上げられるなら、全ての人々を自分の許に引き寄せよう」［**RA**・五八八］。
（3）all good and perfect gifts.「ヤコブの手紙」1・17「良い贈物、完全な賜物は皆、上から来る」［同］。
（4）by thy Spirit seal'd...thy victory.「エフェソ人への手紙」1・13―14「あなた方もまた…あの約束された聖霊で証印を押されたのだ」／「同」4・30「あなた方は神の聖霊によって贖い日へと証印されている」［同］。
（5）thy victory.「コリント人への手紙」15・55、57「おお死よ、汝の棘はどこに、おお墓よ、汝の勝利はどこにあるのか、我らが主イエス・キリストを通じて我らに勝利を与える神に感謝しよう」［同］。
（6）where the Angels...earth and night. 四福音書の「マタイ」28・1―6／「マルコ」16・1―6／「ルカ」24・

1—8／「ヨハネ」20・11—13を参照［同］。

（7）この箇処に一六五五年版には、「聖マグダラのマリア」と作者の自注。「ヨハネによる福音書」20・11「マリアは墓の外に立って泣いていた」［同］。マグダラのマリアはイエスの足に香油を塗り、自らの髪でその足をぬぐったベタニアのマリアと同一人物とされる。「ヨハネによる福音書」11・2、12・3参照／「**マグダラのマリア**」［**小考**（四）14—16］［**F**・二六七］。

（8）her spices, and her ointment.「マルコによる福音書」16・1／「マタイによる福音書」26・7、12参照［**RA**・五八八］。

（9）Primros'd-fields. ハッチンソンは、一六五四年の昇天日は五月四日だったことに注目している［**M**・七四五］。

（10）The Day-star. 太陽のこと［**RA**・五八八］。

（11）light with the deceast. この'the'はおそらく'thee'のこと。昼間全地が暗くなったというイエスの死の間際の状景を描いた「マタイによる福音書」27・45、「マルコ同」15・33、「ルカ同」23・44—45を、ヴォーンは念頭に置いたのは殆ど確か。ヴォーンもまたキリストを「世の光」（「ヨハネによる福音書」8・12）だと考えているのだろう［**RA**・五八八］。

（12）the Chambers of the East. この明らかに慣用とは異なる奇妙な表現にバイブルから支持を求めるなら、「ヨブ記」9・9「（神は）北斗やオリオンをスバルや南の〈チェンバーズ〉を造られた」［**RA**・五八九］。

〈チェンバーズ〉は「新共同訳」では「星座」と訳されているが、'chambers'自体に「星座」の意味は*OED*にもない。「一九五五年版改訳旧約聖書」では「密室」となっていた（尚、「スバル」はこちらでは「プレアデス」だが、これは同じものを指す別称）。［**AV**］の'the chambers of the south'は［**NEB**］では'the circle of the southern stars'（南の星々の円環）である。邦訳ではどちらも「北斗」となっているのは［**AV**］では'Arcturus'（アークトルス、牛飼座の主星・一等星）、［**NEB**］では'Aldebaran'（アルデバラン、牡牛座の一等星）である。

（13）ここからの八行は、〈昇天〉というよりは〈蘇り〉後の弟子たちの活動に当て嵌る［**RA**・五八九］。

（14）forty days more secret commerce.「もっと密かな」とは「使徒」に限られているから。「使徒行伝」1・3「イエスは受難後御自分が生きていることを多くの確実な証拠で使徒たちに示し、四十日間彼らに現れて神の国について話された」［**RA**・五八九］。

（15）so clear/And indisputable.「使徒行伝」1・3「多くの確実な証拠で」［同］。

（16）*Bethani*. イエスが昇っていった所、「ルカによる福音書」24・50—51「イエスはそこから彼らをベタニアの辺りま

で連れてゆき、手を上げて祝福された。そして祝福しながら彼らから離れ、天に上げられた」［F・二六八］。

(17) 天地創造後の、「創世記」2・2［RA・五八九］。

(18) 以下の七行、堕落の本質のうちの幾つかの効果について具体的に言及している［同］。

(19) 「失楽園」第十巻六九二―五行「天上のこういう変化は、ゆっくりではあったが、生みだしたのだった／同じような変化を海に陸に、星からの爆風を／湿気を、霧を、高熱の蒸気を／腐った有毒なものだった」と比較せよ。ミルトンは「高熱の蒸気」によって「流星」を意味させているとファウラーは考えており、「流星は発火した蒸気の固りだと信じられた」と付加している。流星のせいで堕罪予定論者は惑星を「曇に覆われない通行」だとみることが出来ない。罪の結果を、雲が光を覆っているものだと表現するのがヴォーンの特色である［RA・五八九］。

(20) dissolv'd Pearls. 散文作品「オリーヴ山」（M・一八四・一―二）で、クレオパトラの〈溶けた真珠〉の宴をそれ程良いとは思わないと述べている［M・七四五］。

(21) thou dost heave/Thy blessed hands to bless. 注（16）参照［RA・五八九］。

(22) two men in white.「使徒行伝」1・9―10「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった」…白い服を着た二人が傍に立って言う、「同」1・11「今天に上がっていったように地にまた現れる」と［RA・同］、［F・二六八］。

(23) *what two attest, is true.*「ヨハネによる福音書」8・17「あなた方の律法には書かれている、二人が行う証言は真実であると」［RA・五九〇］。「マタイによる福音書」18・16には、聞き入れなければ他に一人二人連れてゆけ、ともある［F・二六八］。

(24) 注（22）「使徒行伝」1・11に、また地に現れる、とあるように［RA・五九〇］。

六行以外は全て一〇音節詩行の二行連句五六行の作品だが、最後の二行は疑似韻（Lord, World）。九―一四行目は音節数は順に4 4 6 4 4 6で、AABCCBと押韻する。直ぐ次の作品が続く。

## 昇天讃歌　Ascension-Hymn

塵と土
人間の太古の着衣！
ここに君たちは留まらなければならない、
でも私はどこか他の所だ、

魂たちはここに滞在するが、安らげないかも知れない、
昇ってゆこうとする者は　着物を脱がなければならない。(1)

それでも死が
訪れる前に死ぬと
知っている者は
空へと歩いてゆく
この人生にあってさえ、でもそういう人は皆
背後にあの古い〈人〉(2)を置き去りにする。

もしも星が
〈天球層(スフェア)〉を離れる筈のものなら
自らの燃え立っている着衣を
最初に損なうに違いない、
だから堕落後は　栄光の衣装を纏って
いるのだから　星は罪を犯すわけにはいかない。

年老いた人は
エデンの園の
範囲内(3)では
〈太陽〉のように輝けるだろう
すっかり裸で、無垢で明るく、
〈天国〉と親密なまま、光のように、

しかし彼が
あの明るさを汚したのだから
彼の衣類はすっかり
薄黒くなり駄目になる筈だ
だからここには値打ちのあるものとしては何も残らず
遂には〈改良家〉の火が燃え上がるのだ。(4)

そこで彼がやってくる！
その強烈な光は
彼の衣服をすっかり
〈天国〉のように明るくした、
〈晒(さらし)し職人〉だ、その純潔な血が流れて
汚れた人を雪よりも白くしたのだから。(5)

彼だけが可能で
他の誰にも出来ないのだ

骨に骨を持ってきて[6]
人を造り直すのは、
そして彼の、悉くを服従させる力によって
土を光よりも速く昇らせられるのだ。[7]

［M・四八二―八三］

**訳注**

（1） Who will ascend, must be undrest. 地上の肉体を衣服に譬える暗喩は、ヴォーンにはよく見られる［RA・五九〇］。

「**受肉と、受難**」一行目とその訳注（1）参照［**小考（五）** 14、15］。

（2） the old Man.「コロサイ人への手紙」3・9「古い人をその行いと共に脱ぎ棄てて、造物主の姿に倣って知識を新たに得た新しい人を身につけるのです」参照［F・二六九］。

（3） Within the line.［**記五**］の九行目と訳注（4）参照［**小考**（九）9、10］。

（4） ここからの七行は最後の審判が言及されている。「マラキ書」3・3「彼の来る日を誰が持ちこたえられるか、彼が現れる時誰が耐えうるか、彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ」参照［RA・五九〇］。

（5） more white then snow.「マルコによる福音書」9・3「すると彼の衣服が輝き、雪のように抜群の白さとなり、この世のどのさらし職人（fuller）もできないほど白くなった」参照［M・七四五］。

（6） bone to bone.「エゼキエル書」37・7「私が預言していると音がした、見よ、揺れ出して骨が現れ、骨が彼の骨に近づいた」参照［M・同］。

（7） Hee alone ... more quick then light.「フィリピ人への手紙」3・21「キリストは万物を支配下に置くことさえ出来る働きに従って、我々の卑しい身体を御自分の栄光ある身体に似た姿に変えて下さる」参照［M・同］。

ABABCCの型で押韻する六行詩七連の作品。各連の詩行の音節数は順に3 4 4 4 4 8、但し第二連の六行目は七音節、第四連に疑似韻（old, could）がある。

キリスト教で祝われる三種類の「日曜日」があるが、この詩集でもそれらが作品化されている。いずれも第二部の初めの辺りに収録されるもの。出現順にみてみよう。

三篇とも、当然のようにバイブルの中の関連の箇処が火花となって自由自在に作中に飛び込み、作品の中から飛び出してきて壮観である。

## 白い日曜日[1]　White Sunday

ようこそ　白い日！　無数の〈太陽〉が
一どきに見えはするが　御身には黒かった
何しろそれらの光の後には　闇が来るのだから、
しかし御身のは永遠に輝いている。

この大きな祝祭に〈使徒の面々[2]〉に
襲いかかったあの炎と、二分(ふた)れに裂けた
〈舌〉付きの頭飾りを着けた一面毛羽立った彼らの頭、
それを〈預言の[3]〉火の冠で飾ったあの炎、

それらに類似のものにこの新しい光[4]はなれるだろうか、
こういう〈蛇〉の光は〈鳩[5]〉と類似になれるだろうか？
汝は敵にさえ**憎しみ**は抱かなかったし[7]
汝の両翼は〈**悲嘆**〉と〈**愛**〉だった。

尤もその時　毎日あの火を誇り　自らの切れ端を
〈キリストの〉上着[8]にピンで留(と)める者はいるものの
公然と口にするのを控えはしない
彼の灯火は自分たちの頭上に輝く[9]のだと。

それでもあの偉大な光[10]の光線が幾らかでも
この下界で御身の〈書物[11]〉の中で輝いている間は
私の視界をそれ程晦ませることは決してないので
私にはどちらを見ればよいか分るであろう。

何故なら御身は　あの偉大な光を閉じ込めて
この取るに足らない光によって交渉を保たれるが
それでも群をこうしてちらちら見ることで
私には〈狼〉と〈羊〉を識別できる。

それだけではなく　私は望みも抱いているので
祈るのだ、**こういう最後は最初と同じもの、**
**あるいはもっと良いかも知れない**が　御身はずっと昔
言っておられた、**こういう最後は最悪になるべきだ**[12]と。

おまけに御身の、御身自らを、御身自身の
愛しむ人々を、扱うなさり方は、私たちの時代を書き記し[13]

私たちの物語はその中に書き留められて
その処罰の数々は、私たちの〈罪〉に広く及ぶのだ。

再び、もしも、ますます悪くというのが[14]
如何なる救済策も受け入れない〈状態〉を示唆するなら
御身の〈十字架〉以来今日の日々に到るまで
〈**例外**〉のない**規則**が定まっているのだ。

それでも、夜の陰鬱なページの中に
星が一つ音も立てずに書き込みを行えるように[15]
この最近の低劣極まりない時代に
御身の昔からの愛は　ある者の上には輝けるのだ。

何故なら　私たちは時々刻々衰退を吐き出し、
私たちの最良の**態度**と最も高度な**安静**は
**調性**を唯変えることに他ならず
人を喜ばせる〈**消費**〉の一つだが、

それでも汝　偉大な永遠の〈岩〉[16]は
その高みをどの時代にもまして輝やかせながら

依然として同じ状態のままで解き放てるのだ
自らの水を　思い焦がれる魂に。

それ以来御身はこの日もその後も
ずっと同じで、昔のままだった
だから御身の愛を和らげるものは何もなく
私たちの心は死んで　罪深く冷たいままだ、

御身が爾来ずっと長らく　いそいそと私たちの
水浸しの地所を買い取って　御身自らに
〈呪い〉をかけ　私たちが御身の財布を
縛った結び目を破り棄てたように、[17]

今度は御身の恩寵が更に御身の愛へと進む
ようにして下さい、何故ならその手段によって
私たちは、卑しい土でしかなくても見事な黄金に
なれるのだから、御身が浄めて下さったものに。

おお　来て下さい！私たちを洗煉して下さい御身の火で！
私たちを洗煉して下さい！私たちは迷っています。

御身の星々をバラムの報酬のために[18]
ありふれた石炭屑に分解しないで下さい！

［M・四八五―八六］

**訳注**

（1）「聖霊降臨日」（Whitsunday）のこと。「復活祭」（Easter）後七回目の日曜日。五旬節（Pentecost）の日に、聖霊（the Holy Spirit）が降臨したことを記念するキリスト教会の祭として祝われる。「白い」とは通常、五旬節の祭の際に新たに洗礼を受ける人が白い洗礼用長衣を着た古い習慣に起因するとされる［RA・五九三］。

（2）「使徒行伝」2・3、五旬祭の日に一同が集っていると激しい風と共に天からの音が響きわたって、「炎のような舌が分かれ分かれに現われて各々の上に留まった」［RA・同］。

（3）Prophetic.「使徒行伝」2・16―18。預言者ヨエルを通して神が言う、「終りの日々に私の霊を全ての人に注ぐ。するとあなた方の息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。私の僕や召使女にもその時には私の霊を注ぐ、すると彼らは預言する…上と下で…血と火と立ち込める煙」［RA・同］。

（4）new lights. 新しい教義、もしくは新たな宗派［少数派の非国教徒］［M・七四五］［F・二七二］。

（5）The Dove. 鳩が象徴する「聖霊」。「マタイによる福音書」3・16「（イエスは）鳩のように降りてくる神の霊を見た」［RA・五九三］。

（6）Thou. 前行の「鳩」の代名詞。だが実際はキリストを指す［RA・同］。

（7）「ルカによる福音書」23・34「その時イエスは言われた、父よ彼らをお赦し下さい、自分が何をしているか知らないのです」を参照［RA・同］。

（8）磔刑の際、キリストが着ていた縫い目のない上着。「ヨハネによる福音書」19・23「下着も取ってみたがそれには縫い目がなく上から下まで一枚織りであった」［F・二七二］。

（9）「ヨブ記」29・2―3「神に護られていた過去の日々に戻して欲しい、あの時は彼の灯火が私の頭上に輝いていて、その光で私は闇の中を歩いたのだった」。ヴォーンは、個人への天啓があったと自認する宗派心の強い人々の天啓に関心がある［RA・五九三］。「**献辞**」Ⅱ、二八行目と訳注（3）［**小考**（三）17］［M・七四五］。

（10）that great light. 聖霊の光［RA・同］。

（11）thy Book. バイブルを指すのは殆ど確か［同］。

（12）「マタイによる福音書」19・30「最初にいる多くの者が最後になり、最後にいる者が最初になる」。「同」12・45

「「自分より邪悪な他の七つの霊と共に住みつくと」その人の最後の状態は最初よりは悪くなる、この邪悪な世代の者たちもそのようになるだろう」参照［F・二七二］。「テモテへの手紙」二、3・13「邪悪な人や誘惑者は、惑わし惑わされながらますます悪くなってゆく」［M・七四五］。

（13） pens our times... Crimes. G・ハーバート「葡萄の房」"The Bunch of Grapes"［七行詩四連計二八行の詩、WiL・四四八―五二］の一一行目と一四行目「彼らの物語はペンで我々を書き留める」、「彼の昔の正義が我らの罪を溢れ出させる」参照［M・七四五―四六］。

（14） この二行は括弧に入っている感じで、五行前の二八行目に言及している［M・七四六］。

（15） interline.＝行間に挿入する。*OED* がこの箇処を引用する。G・ハーバート「熱望」"Longing"［特異な形態の六行詩一四連計八四行の詩、WiL・五一二―一八］の四九―五二行目参照、「全く世界は御身の書物で／そこではあらゆる事柄がページをあてがわれてきた／それでも意気地のない表情が／行間に入り込んでいる」と比較のこと［RA・五九四］。

（16） この連、「出エジプト記」17・6「見よ、私はホレブの岩の上であなたの前に立つ。あなたはその岩を打て、そこから水が出て民は飲むことが出来る」と「コリント人への手紙」一、10・4「彼らは自分たちに蹤いてきた霊的な〈岩〉から飲んだがこの〈岩〉こそキリストだった」を参照［RA・同］。

（17） The knots we tyed upon thy purse. G・ハーバート「祈り」二"Prayer"（II）［六行詩四連計二四行の詩、WiL・三七一―七三］の一七―一八行目「御身の財布を縛っているものを破り棄てることで／御身は気前よく出来たかも知れなかったのだ！」参照［M・七四六］。

（18） *Balaams* hire. 金銀に満ちた家。「民数記」22・18「たとえバラクが金銀に充ちた家を贈ってくれても、私には神の言葉以上のことも以下のことも出来ません」［M・七四六］［F・二七四］。バラムはメソポタミアの預言者。モアブ［死海の東方、現在のヨルダン南西部にあった古代王国］の王バラクの依頼でイスラエルの民を呪いに出かけたが、乗っていたラバに戒められて彼らに神の祝福を祈り、良い預言を告げた。

各行全て八音節の四行詩一六連から成る。各連は交互韻（奇数行が疑似韻のもの六連）の詩。

反国教徒である清教徒が〈蛇〉の光で国を牛耳る「この最近の低劣極まりない時代」を生き凌ぐ希望を、洗煉する火を掲げての聖霊降臨に「私」は托そうとして、「白い日

曜日」を祝福しようとする。

## 三位一体主日[1]　Trinity-Sunday

おお　神聖な、祝福された、栄光溢れる三者よ、
天国で三位一体における〈唯一の神〉
となる永遠の証人よ！

ここ地上で（人間が抵抗した時）
〈精霊〉、〈水〉及び〈血〉が
我が〈主〉の〈顕現〉を真物にしたように

私の中の**〈複数の予型〉**[2]を
選ばれたものに、無料で買われて封印されたものにし、
そなたら三者によって所有され、蓄えられ、**〈聖人にされる〉**ようにして下さい！

［M・四九三―九四］

**訳注**

（1）聖霊降臨日（Whitsunday）［＝五旬節（Pentecost）、即ち、復活祭（Easter）後七回目の日曜日、つまり、キリスト復活後五〇日目の聖霊降臨を記念する祝祭日］の次の日曜日。

（2）*Anty-types.* 新約聖書中の出来事が旧約聖書中に予示されているように、ある事柄が前以って何らかの型や表象によって予示されるもの、あるいはそれを象徴する人や物。ヴォーンはこれによって自分自身の霊、肉体（水によって象徴される）、血を、意味させている［RA・六〇五］。

この詩は、G・ハーバートの同題の作品［WiL・二四八―四九］の形式に従っている［M・七四八］ので、ここでハーバートのその詩を並べて見ておきたい。

## 三位一体主日　Trinitie Sunday（ハーバート作）

主よ、私を泥から形作られ
　御自らの血でもって私を救い出され
　良いことを行うよう私を浄めて下さったのです、
これまで犯してきた私の全ての罪を取り除いて下さい、

私はしたたかな負債を告白するのですから
私はもう二度と罪を犯さぬよう努めます。

私の心を、口を、両手を、私の中で豊かにして下さい、
信仰で、希望で、慈悲で、
私が走り起き上がり、御身と共に安らげますように。

この聖霊降臨日直後の日曜日は、父と子と聖霊という、一個の神の頭の中の三者（the three-in-one Godhead of Father, Son and Holy Spirit）を祝福する日で、この教義のバイブルでの主な起源は「マタイによる福音書」3・16―17である。キリストの洗礼の間、〈父〉が「これは私の愛する息子である」と宣言すると、聖霊が「鳩のように」イエスに降りる［WiL・二四九］。

今並べたヴォーンとハーバート両者の詩は共に全て八音節詩行から成り、前者はAAA／BBB／AAAと、第一連と第三連が同じ押韻構成で流れが戻る感じだが、後者の押韻はAAA／BBB／CCCと先へ進行してゆく。

ハーバートの三つの主な徳は、前行の肉体の各部と結びついている。即ち、「信仰」'faith'は「心」'heart'に由来し、「希望」'hope'は「口」'mouth'を通して表明され、「慈悲」'charitie'は「両手」'hands'で実践される。「走る」'run'「起き上がる」'rise'「安らぐ」'rest'は「太陽の動き」を表す標準の名称で、語り手の行動を、息子にして太陽であるキリスト（Christ the son/sun）のそれと結びつけたものだが、唯、一日の動きの「起き上がり」「走り」「安らぐ」は、贖いの型を強調するために順序を変更されている。まず、目前の競争を忍耐強く「走り」、それからキリストと共に「起き上がり」、最後に永遠に「安らぐ」のだと［WiL・二四九の諸注］。

両者を並べて一読しただけでも、ハーバートの詩はすっきりとして分かり易い、信仰心篤い「宗教詩」だと感じ取れるが、ヴォーンのは例にして例のごとく屈折していて、晦渋である。

『火花散る燧石』の中の宗教詩を、ベセルは大きく三型に分類している［BS・一三九―四〇］。

（一）神に個人として呼びかけるか、読者に勧告する、悔い改めに専心・奉献する詩（Penitent devotion）、（二）教義に関する詩（doctrinal）、（三）ヴォーン自身の「自然神秘主義」（nature-mysticism）を、換言すれば、宇宙の秩

序の中に浸透している神授・天来の生命をヴォーンが本能的に把握しているものを、具体化しているような詩。ベセルは更に次のように述べている。

ヴォーンは十七世紀の偉大な宗教詩人の中で、最も独創性に富む人であり且つ摸倣者であった。上記第三のグループに属する詩で具体化されるような洞察・透視力に匹敵するような詩人は他にはいないが、宗教詩、非宗教詩を問わず彼の詩には、他者の詩句の使用が多い。特に自らの模範とするG・ハーバートを摸倣し、反響させる。しかし、ハーバートの特徴である調べの明瞭な思想と確かさの組み合せに到っていないと［BS・一四〇］。

それは、到っていない、のではなく、到ることが目標ではなかっただけのことである。ヴォーンはハーバートを摸倣したのではなく、自らの新しい詩作にハーバートを参画させたのだということは、本稿での二篇のハーバートの並記作品との比較だけでも感じ取られよう。

## 復活前主日[1]　Palm-Sunday

さあ、君の枝々を落とせ、道に撒き散らせ
　　この日の草木よ！
そうすれば苦難がこの上なく緑に華やかに[2]してくれる。
悲痛の〈王[3]〉、悲しむ人が
未だに泣きながら、湿った朝のように
君の陰と瑞々しさを借りにやってくる[4]。
着るのだ、着たまえ君のとっておきの衣装を、
喜びの道に祝祭日を作らせよう
そして野にさまよい咲き出る花々や
密かな木立小森に　本道を保たせよう。
木々、花々と香草、小鳥たち、獣どもと石また石、
これらは人間の堕落以来、呻きながら思っている[5]
あの　全てを償ってくれる[6]子羊に逢えるものと、
君の頭を上げては嘆きの声を後に残せ！
　　なぜなら彼がここへやってくるのだから
　　その死が人間の命となり
君の完全な自由となる人が。

聞きたまえ！　子供たちが金切り声で高らかに
　　**讃美**（ホサナ）の叫びを挙げている様（さま）を、
彼らの喜びは遠方の空を奮い立たせ
そこでは座天使[7]と〈熾天使[8]〉が応え
彼ら各々の守護の〈御使いがた〉が輝き歌っている
　　明るい輪となって、
　　そういう若い爽やかな浮かれ騒ぎの
　　せいで　天上と地上は
相携えて楽し気な〈調和（シンフォニー）〉に到る、

あの無害な若い幸せな〈驢馬〉は
これが通過するずっと前[9]に姿を見られていたが
こういう喜びをわくわくしながら共にして
自分の〈造物主〉を生み出すように運命ずけられている。

〈棕櫚〉と〈花々〉と〈露〉の貴重な祝祭日よ！
その稔り多い夜明けは　希望と光を放ち
夜明けの明るい荘厳な儀式が示したのだ
三日目の喜ばしい日を　悲しい二夜を経た後に。

私は〈太陽〉の前に起きよう
私は多くの木々から枝を切り払おう[10]
そして全く一人だけで早朝の走りを全うしよう
花々を集めて汝を歓迎すべく。

だからあの〈棕櫚〉のように曲りは[11]しても私は耐えよう、
私は今尚、子供で、まだおとなしいのだ
哀れな〈驢馬〉と同じく、それを尊大な者は嘲るが、
私の尊ぶイエス様だけが捜し求めるのだ。

もし私が全てを失って　聖なるヨブの
あの語り草の悲嘆の数々に耐えねばならないとしても
私はかまわないのだ　それなら私は確保できるだろう
**緑の〈枝〉**一本と**白衣**[12]一着とを。　［M・五〇一―二］

**訳注**

（1）パームサンデー。復活祭直前の日曜日。キリストが受難を前にしてロバに乗ってエルサレムに入った時、群衆が棕櫚の枝を打ち振って歓迎した出来事に因む。英国国教会での名称。プロテスタントでは「棕櫚の日曜日［主

日]」、ローマカトリックで「枝の主日」、ギリシャ正教で「聖枝祭」。「マタイによる福音書」21・8、「ヨハネによる福音書」12・12—13　参照。

（2）　most green and gay. ヴォーンは散文の著書『オリーヴ山』の中（M・一七四・三七）でこの句を使っている、「木の葉は再び我らの頭上で囁くようになり、これまで同様、緑に　華やかになる…」[M・七四八]［RA・六〇九]。

（3）　The King of grief. G・ハーバート「感謝祭」"Thanksgiving"［五〇行の詩、WiL・一一一—一五］の一行目「おお悲痛の〈王〉！（奇妙な称号だが真実だ、／全ての王の中で御身だけに相応しい）」参照［M・七四八］

「イザヤ書」53・3「彼は軽蔑され、人々に見棄てられ、種々の悲しみに見舞われて悲痛を知る人だった」参照［RA・六〇九]。

（4）　comes to borrow. 「ヨハネによる福音書」12・12—13「その翌日、祭りに来ていた大勢の人々は、イエスがエルサレムに来られると聞き、ナツメヤシの枝を手に迎えに出て、ホサナを叫んだ」［RA・同]。

（5）　expect with groans. 「ローマ人への手紙」8・22「被造物が全て今日まで共に呻き、産みの苦しみを味っていることを私たちは知っている」を参照［F・二九四]。

［小考（八）39、訳注（2）］も。

（6）　which all at once. この原文に誤りがあるようで、Sir Edward Marsh の校訂（*TLS* 19, July 1947）である 'all atones' がよさそう。前二行の末尾が 'stones', 'groans' なので押韻にも適う［M・七四八］［RA・六〇九]。

（7）　thrones. 天使の第三階級。［次の〈熾天使〉同様］大文字で始めるべきもの［RA・同]。

（8）　Seraphins. 正しくは Seraphim. 最上級の天使［同]。

（9）　一六五五年版にはここに、「ゼカリア書」9・9　と自注がある。この一節は王がロバに乗ってやってくるのを予言している。

（10）　この二行、G・ハーバート「復活祭」"Easter"［六行詩三連と四行詩三連計三〇行の詩、WiL・一三八—四三］の一九—二〇行目「私は花々を手に入れて道に撒き散らした／私は大枝を多くの木々から切り落した」と比較のこと［M・七四八]。

（11）　wrong. これは 'bent' の意（*OED* s. v. A. 1）。ヴォーンの詩「棕櫚の木」"The Palm-tree"［M・四九〇—九一］の八—九行目「彼は曲がれば曲がるほど／ますます成長するのだ」を参照［同]。

（12）　one *green Branch* and a *white robe*. 「ヨハネの黙示録」7・9「…大群衆が白衣を身につけ、手に棕櫚の枝を持ち…」参照［F・二九五]。

前半の五連の押韻構成は、ＡＡＡ／ＢＢＢ／ＣＣＣＣ／ＤＤＤＥＥＥ／ＦＦＦＦＧＧＨＨＥで、速度の付いてきた流れに制動がかかる趣で一瞬休止した後、後半の五連は四行ずつで、第六連が二行ずつの押韻、あとの四連はそれぞれ交互に韻を踏む落ち着いた感じで締め括られる。

イエスは死後三日目に復活するので、それが「三日目の喜ばしい日を、悲しい二夜を経た後に」である。「**申し出**」で表明したような生き方を全うするためにも「私」はイエスの復活と昇天に思いを到さねばならないのだろう。

＊参考文献　本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。


［**A**］Austin. Frances. *The Language of the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1992.

［**B**］Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London : The Macmillan Press, 1972.

［**BE**］Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan : Characteristics and Intimations*. London : Cobden Sanderson, 1927 ; rpt. New York, 1969.

［**BEi**］Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo : Kodokan, 1952, 2nd ed.

［**BEii**］Blunden, Edmund. *Nature in English Literature*. London : The Hogarth Press, 1949. 1st. ed. 1929.

［**BH**］Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia : Chelsea House Publishers, 1986.

［**B・P**］Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry*（Stratford-upon-Avon Studies 11）London : Edward Arnold, 1970.

［**BS**］Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London : Dennis Dobson, 1951.

［**C**］Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2vols. London and New York : Charles Scribner's & Sons, 1896.

［**D**］Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.

［**E**］Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174–75.［岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』（研究社　一九七四）三

一一三—一一五]°

[F] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday. 1964 ; New York University Press, 1965.

[FK] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.

[G] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.

[GH] *Seventeenth Century Studies presented to Sir Herbert Grierson*. London : Oxford University Press, 1938 ; rpt. New York : Octagon Books, INC., 1967.

[GR] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.

[H] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.

[HE] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.

[HE-] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; 1932 ; rpt. New York : Haskell House, 1966.

[HG] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets : A Casebook*. London and Bashingstoke : The Macmillan Press, 1974.

[H·S] Healy, Thomas and Jonathan Sawday, eds. *Literature and the English Civil War*. Cambridge : Cambridge University Press, 1990.

[L] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets : Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford : Clarendon Press, 1934.

[LH] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston : Little, Brown and Company, 1865.

[M] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford : Clarendon Press, 2nd ed. 1957.

[M-] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan : Poetry and Selected Prose*. London : Oxford University Press, 1963.

[ME] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton : Princeton University Press, 1969.

[ML] Martz, Louis L. *The Paradise Within : Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London : Yale University Press, 1964.

[ML-] Martz, Louis L. *The Poem of Mind : Essays on Poetry/English and American*. New York : Oxford University Press. 1966.

[ML:=] Martz, Louis L. *The Poetry of Meditation : A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. New Haven and London : Yale University Press. 1962. 1st ed. 1954.

[P] Pettet, E. C. *Of Paradise and Light : A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge : Cambridge University Press, 1960.

[R] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes : English Lyrics in a European Tradition*. The Hague : Mouton, 1973.

[RA] Rudrum, Alan, ed. *Henry Vaughan : The Complete Poems*. New Haven and London : Yale University Press, 1976.

[S] Simmonds, James D. *Masques of God : Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh : University of Pittsburgh Press, 1972.

[SJ] Strong, James. *The Exhaustive Concordance of The Bible : Showing Every Word of the Common English Version of the Canonical Books, and Every Occurrence of Each Word in Regular Order ; Together with a Comparative Concordance of the Authorized and Revised Versions, including the Amerian Variations.* New York and Cincinati : The Methodist Book Concern, 1894 ; rpt. 1926.

[SR] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London : Faber and Faber, 1993. [ロナルド・シュくード編注『T・S・エリオットクラーク講演』村田俊一訳（松伯社 一一〇〇一）]。

[S・V] Spencer, Tneodore,and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry : Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y. : Kennikat Press, 1939.

[T] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press : 1947 ; rpt. Phoenix Books, 1961.

[TT] Tuttle, Imilda. *Concordance to Vaughan's SILEX SCINTILLANS.* University Park and London : The Penn-

sylvania State University Press, 1969.
［W］Whittier, John Greenleaf, *Anti-Slavery Poems : Songs of Labor and Reform*. London : Macmillan and Co., 1889.
［WG］Williamson, George. *The Donne Tradition : A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York : The Noonday Press Inc., 1958. 1st ed. 1930.
［WGi］Williamson, George. *A Reader's Guide to the Metaphysical Poets*. London : Thames and Hudson. 1968.
［WH］White, Helen C. *The Metaphysical Poets : A Study in Religious Experience*. New York, 1936 ; rpt. New York : Collier Books, 1966.
［WiL］Wilcox, Helen, ed. *The English Poems of George Herbert*. Cambridge : Cambridge University Press, 2007.
［deV］Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. Amsterdam・London : North-Holland Publishing Co., 1974.
［荒川］荒川光男「黙想詩「夜」を読む」（『十七世紀英文学のポリティックス』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九九。一八一—九七）
［川崎1］「ヘンリー・ヴォーンの自然神秘主義」（川崎寿彦『薔薇をして語らしめよ—空間表象の文学』名古屋大学出版会、一九九一。一七四—九八。）
［川崎2］川崎寿彦『鏡のマニエリスム—ルネッサンス想像力の側面』研究社、一九七八。一五二—五八。
［松崎］松崎毅「ルーパート王子と「鷲」——ヘンリー・ヴォーンの世俗詩と検閲をめぐる論考——」（『十七世紀と英国文化』十七世紀英文学会編、金星堂、一九九五。一七二—九二）

## バイブル

［AV］Authorised Version（of the Bible）. 別称 King James Version. 欽定訳聖書。The Holy Bible containing the Old and New Testaments Translated out of the Original Tongues and with the former Translations diligently compared and revised by His Majesty's special command, A.D. 1611. Appointed to be read in Churches. （London : The British and Foreign Bible Society）.
［NEB］The New English Bible with the Apocrypha. （Oxford University Press Cambridge University Press, 1970）.
『聖書　新共同訳　旧訳聖書続編つき』（東京・日本聖書

教会　一九八九年）

尚、本「ヘンリー・ヴォーン小考」でのバイブルは、勿論ヴォーンが知らないものなのでこの新共同訳ではなく、それを参照しながらではあるが、権威ある英訳標準版［**AV**］の、なるべく忠実な拙訳である。

本誌連載のこれまでの拙稿は左記のように略記、算用数字はそのページを表示。

［**小考**（一）］「アスク川の白鳥――ヘンリー・ヴォーン小考」「成城文藝」第一九九号、1―24、二〇〇七年六月。

［**小考**（二）］「その瞑想を追い始める――ヘンリー・ヴォーン小考（二）」「同」第二〇〇号、47―67、二〇〇七年九月。

［**小考**（三）］「〈死〉からの再出発――ヘンリー・ヴォーン小考（三）」「同」第二〇一号、13―33、二〇〇七年十二月。

［**小考**（四）］「「序文」と「反歌」に包まれて――ヘンリー・ヴォーン小考（四）」「同」第二〇二号、1―32、二〇〇八年三月。

［**小考**（五）］「複眼による並置比較思考――ヘンリー・ヴォーン小考（五）」「同」第二〇三号、1―27、二〇〇八年六月。

［**小考**（六）］「追求は異なる角度、視点から――ヘンリー・ヴォーン小考（六）」「同」第二〇四号、15―42、二〇〇八年九月。

［**小考**（七）］「花と星へ　嵐と夜から苦悶に耐えて――ヘンリー・ヴォーン小考（七）」「同」第二〇五号、13―43、二〇〇八年十二月。

［**小考**（八）］「〈隠された宝〉へ向かって――ヘンリー・ヴォーン小考（八）」「同」第二〇六号、17―66、二〇〇九年三月。

［**小考**（九）］「哀歌に託す自己励起――ヘンリー・ヴォーン小考（九）」「同」第二〇七号、1―33、二〇〇九年六月。

拙訳での〈　〉付きとゴチック体は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。

＊本稿は二〇〇八年度成城大学文芸学部特別研究助成による成果の一部である。